

嶋満神社便り

令和五年 九月号(第四十二号)

発行 嶋満神社奉賛会

神社とは何か・・・嶋満神社の場合

随分と大仰なタイトルでびびくりなさらないでください。シンプルにみていきます。

日本人の生活とは切っても切れない「神社」の存在その意味を歴史的にみると、社会学者、新谷尚紀氏は、歴史の流れの中では次のような段階に分けられると言います。著書「氏神さまと鎮守さま」によれば、和歌山県の「隅田八幡宮」(すだはちまんぐう)の場合を例に挙げ、

- ① まず平安時代には石清水八幡宮の「荘園支配」の中での存在。荘園の経営、年貢取り立てなどの実権
- ② 次に力を握った武家の時代には、隅田一族の荘園支配のための氏神としての存在。
- ③ 室町期以降はその村、その地域全体の村人たちの氏神としての存在・・・という分類をされています。

つまり、隅田八幡宮はまず石清水八幡宮の荘園支配のためにその別宮として勧請され、次に武家が支配者となると隅田一族の氏社となつて彼らが経営の実権を握り、やがて近世には地域の民全体が氏子となり、祭礼費用を分担し合う、今日の大方の神社の形となつていったのです。



隅田八幡宮

では当社、嶋満神社の場合はどうだったのでしょうか？平安時代の貞観年間に正二位を授かった頃、不穏な朝鮮半島情勢を背景に「妖族」の侵入が相次ぎ、「外敵からの守り」として宇佐八幡が勧請されましたが、もちろん「氏神」といった概念はなく、海に浮かぶ「淵島」と呼ばれる小島には今日のような立派な拝殿があつたかどうかはわかりません。ただ「素朴な」海の守りとしての「神域」が、その山頂には存在していたでしょう。

やがて織田、豊臣の時代に細川氏が当地を支配するようになる、この地に影響力のあつた水軍を配下に置くため、海の守りの必要性から当社は細川氏から手厚い保護をうけます。先述の隅田八幡のように丹後支配の象徴的存在だったのでしよう。

江戸時代になると周囲の湾の干拓により田地が増え、豊かになった豪農たちによつて当社の運営は賄われます。つまり、氏神としては旧溝尻村や旧矢之助村全体の、というわけではなく、干拓によつて苦心の末、得られた田地を寄進して氏子となつた津田氏や、旧泉源寺村も含めた中での限られた崇敬者、篤志家たちの運営に任されていたようです。

それが第二次大戦による用地接収、移転遷宮、昭和三十六年の再遷宮、本貴地浮島への復帰を経て現在は祭礼と維持管理は浮島会の手で行われ、日々のお世話とともに中心的役割を担う奉賛会員も、ほぼ全員が浮島会員となっています。つまり当社は今や私たち浮島会員にとつては白絲濱神社に次ぐ「第二の氏神様」と言つてもいいでしょう。

実際に先の新谷尚紀氏によれば、滋賀県の苗村神社(なむらじんじや)と周辺の村々の神社の例のように、より広い地域での「惣氏神」と、より狭い地域、各村々での「村の氏神」と言つように村民と二重二重に氏神、氏子の関係を持つているところも多くあるようです。



苗村神社

このように一口に「氏神様」といっても似たようなところ、また違った形と、いろんな形があることが分かります。そして歴史の中でその意味や位置づけもまた、様々な形に変化し続けていることも分かりますね。

しかし経済的なことを別としても、私たちの心の中に、その生活をするにあつたての様々な事柄の「よりどころ」として、神社は存在していることは確かなようです。

最後になりましたが、先の八月例祭に於きましては、会員の皆様には大変お世話になり、ありがとうございました。また、たくさんのお供えも頂戴し、重ねて御礼申し上げます。